

武力蜂起とも關係薄かった。その上新興サウディ・アラビア國王イブン・サウドがオランダの要請を容れて彼等の逮捕に踏み切ったことは、全世界に反響を起こし、オランダの立場を苦しいものにした。

五四運動におけるプロレタリアートの役割について

狹間直樹

五四運動が中國近代史上の劃期的事件であることは、だれしもの認めるところである。その劃期性については、毛澤東の指摘にもとづき舊民主主義革命から新民主主義革命への轉換點ととらえる觀點をほぼ定説としてよいだろう。新民主主義革命の内容規定としてふつう挙げられるのは、①プロレタリアートの指導、②人民大衆の参加、③反帝國主義・反封建主義の性格、の三つの指標である。

これらの三指標は、いうまでもなくたがいに関連しあうものであるが、とくに第一項については五四運動を新民主主義革命の開始と認める研究者のあいだでも評價がわかれ、論争がおこなわれてきた。かつて一九六〇年代のはじめに中國でおこなわれた一連の論争は、プロレタリアートの指導を確認することで一應の結着がつけられたかのごとくであるが、ちかごろのわが國の研究では、たとえば徳毛和子氏のようにブルジョアジーによる指導との見解もだされるにいたっている。

プロレタリアートの指導を云々するためには、その階級的形成と運動のなかではたした役割についての評價をまず確定せねばならない。六三^一後における「罷工」「鬭争」の具體的分析を通じて上述の課題にたいする卑見をのべたいと思う。

元末明初の西系紅巾について

野口鐵郎

元末の混亂の中に生起した紅巾勢力には、大別して二つの流れがあったことは周知のことである。そのうち、白蓮教系とも東系とも呼ばれている部分に次の王朝の創建者朱元璋が係わっていたが、長江中流域から上流にかけての江西・湖廣・四川などを基盤としたいわゆる西系紅巾は、朱政權と敵対し、やがてその前に屈伏してしまふ。

本日は、この西系紅巾の構成要素、それと朱政權との關係にしばらく報告し、ご叱正を得たいと思う。

西系紅巾集團を構成する諸要素は、東系紅巾におけるそれの如くではない。少くとも、彌勒下生信仰集團と子元系「普」字信仰集團の二つの宗教的集團が武力的集團と結びついて存在し、ときに両者は混淆する様相を見せながらも、それぞれ別個のものとして活動し、對抗していた。いわば、宗教的には、徐壽輝——明玉珍の派と陳友諒の派とがあったのであって、しかも、前者にはその宗教に基づく世界出現の姿勢がみられ、後者には武力的集團としての色彩が強

くみられる、というように、かなりの複雑さを呈示している。

この勢力に對する朱政權の對應策は、武力的討伐と懷柔とであった。しかし自己權力の確立とともに、それはかなり徹底した宗教結社運動に對する彈壓にかわる。恐らくはその結果が、永樂時代以後の、華北に比重のかかる明代の宗教結社分布を作り上げる一因になったのであらう。

木華黎王國について

萩原 淳 平

ジャイル部の木華黎は博爾朮らと共にモンゴル軍の四傑の一人として、チンギス・カーンの全モンゴル統一に貢獻し、開國の功臣の第一にあげられ、左翼萬戸に任命された。この間、木華黎は對ナイマン戦やケレイト戦などで目覺しい活躍をし、すぐれた武將として有名である。

のち、彼はチンギス・カーンの金國遠征に中央軍の部將として山

東半島にまで侵入したが、一二一七年にチンギス・カーンは、「太行之北、朕自經略。太行以南、卿其勉之。」と木華黎を國王に任じて、河北の經營支配を彼に一任した。國王として農耕定着社會を経営支配するには、單なる武將だけでは務まらない。彼は軍事行動中にも農耕社會や、そこに生活する漢人の思想なり行動に留意し、河北支配に努めた。木華黎と史天祥や張柔ら所謂漢人世侯との關係は、木華黎王國の性格を知る上に重要である。彼の國王在任期間は長くはなかったし、金朝を滅亡に追い込む事もなかったが、河北の治安回復には、大きな功績を残した。

ひるがえって、チンギス・カーンが金國に侵入してから、世祖クビライが元朝をたて、征服王朝を樹立するまでを見ると、凡そ五十年を要している。その間、モンゴル族は必ずしも直線的に征服王朝樹立に指向したわけではない。時には征服王朝的方向に進み、時にはそれに逆行するような政策が施され、紆餘曲折をへて征服王朝は完成されて行つた。この中で、木華黎國王およびその後繼者が、如何に行動し、或はさせられたかを検討し、木華黎王國の果たした役割の位置づけを試みる。